小児科　鈴木信子
名古屋大学医学部　昭和45年3月卒業
日本小児科学会認定専門医

産婦人科　鈴木正利
名古屋大学医学部　昭和45年3月卒業
前愛知医大産婦人科助教授
日本産婦人科学会認定専門医

名古屋市名東区若葉台502
（若葉台ビル1F）

☎(052)777-2888
〈一般通話用電話〉

★日曜・休日の前後日（土・月）は平日よりも混雑致しますので慢性疾患の方はお避け下さい。

★直接来院の枠は１時間当たり1名分しかありませんので、予約をとってご来院が確実です。

◆診療時間

時間＼曜日	月	火	水	木	金	土
9:10～13:00	○	○	○	○	○	○
17:30～19:00	○	○	／	○	○	△

△土曜日午後14:30～16:00

◆休診

水曜日午後・日曜日・祝日

（スマホは上記QRで予約サイトへ）

WAKABADAI CLINIC

(PEDIATRICS · OBSTETRICS & GYNECOLOGY)

小児科
産婦人科

医療法人 **若葉台クリニック**

小児科　鈴木信子
産婦人科　鈴木正利

http://www.wakabadai-clinic.or.jp/

患 者 の 皆 様 へ

当クリニックは、この地区においてよりよい小児科と産婦人科の医療を提供し、子供と女性の健康を守ることを基本理念として運営されています。

小児科は、**病気の子供さんの治療**はもちろんのこと、**健康な乳幼児の健診、育児相談、栄養相談を水曜日の午後**(事前予約制、病児はご遠慮下さい)に行っていますので、ご希望の方は早目に予約して下さい(現在3ヶ月待ち)。

産婦人科は、**無床のため分娩は扱いません**が、妊娠の管理、不妊症、排卵障害、更年期障害、子宮癌・卵巣癌・乳癌の検診などトータルな意味で全女性の相談相手としての医療を目指しています。(なお、人工妊娠中絶・非配偶子間人工授精・試験管ベビーなどは信条の面から施行していません)

子育てを経験した女医の子育ての中に根付いた身近で信頼される小児科と、長年の大学病院勤務で培った知識と経験に基づいた信頼される産婦人科でありたいと思っていますが、お気付きの点があれば、入口の**投書箱**にご意見を書いて入れて下さい。参考資料にさせて頂きます。

当院の診察は予約制です

この自動予約システム「Drうける君」は、当院が平成3年10月に日本で最初にNTTグループと共同開発しました。その後、多くの会社(薬品卸会社など)が同様なシステムを真似て市販するに至りましたが、オリジナリティはこの「Drうける君」にあるとされ、多くの雑誌に紹介されました。詳しくは当院のインターネットのホームページをご笑覧下さい。

これは待合室での患者さん同士の相互感染を防ぐ意味と待ち時間をなるべく少なくする目的があります。

緊急やプッシュ電話のない方、初診の方のために直接来院の空枠も残していますが、電話予約をして頂いた方が確実です。

★**予約時間は、あくまで予定時間です。**採血／点滴／レントゲン撮影などがありますと、遅れることがありますが、ご容赦下さい。

当院は医薬分業です

医師の発行した処方箋を最寄りの調剤薬局に持参して薬をもらうシステムです。　医師と薬剤師の協力で、**より安全な服薬**ができます。

育児書、児童心理書、ビデオなども皆様のご参考にと思い設置し、**貸し出し**もしていますので、ご利用ください。

小児科診察風景▲

当クリニックはささやかな無床診療所でございますので、精密検査や入院治療の必要のあると思われる子供さんは、私達の出身大学の名古屋大学病院をはじめ、近くの愛知医大病院、第二日赤病院、陶生病院、東市民病院などの公的病院にご紹介申し上げるようにしています。

産婦人科診察風景▲

▼受　付

▼待合室

薬の投与方法について

最近のママの中には、薬の飲ませ方のわからない方が増えています。このパンフレットをお読みになってご参考にして下さい。

薬をはじめからミルクや果汁と混ぜて飲ませると、飲みきれずに吐く原因になります。いやがって薬を飲まない子供のママに聞くと、たいていこの方法が多く、しかも、いやがるのに無理に飲ませると吐くことが多いようです。特に下痢止めの薬は苦くて溶かすと飲んでくれませんので、溶かさないで下さい。

当院では、変性しやすい水薬やシロップ薬よりも、なるべく調合しやすく日持ちのする粉薬やドライシロップまたは坐薬を処方しています。

◎乳児の場合

粉薬は水で半練りにしてから、ママの指先につけて乳児のほおの奥の内側にぬり、その後で母乳かミルクを与えて下さい。(奥のほうが感覚がにぶく、舌先は逆に敏感なためです)

◎幼児の場合

いやな薬を飲ませるコツは、かならず子供に「病気をなおすためのお薬ですよ」と優しく語りかけて、納得させながら飲ませることです。やはり、子供の納得とママの根気で薬を上手に飲ませることです。無理やりはダメです。いやがるときは、1回の量を減らして2回か3回に分けて飲ませてください。たくさんの水分を与えすぎると、吐く原因になります。上手に飲めたときは、ほめた後でお菓子などを与えるのも方法です。

◎坐薬(さしぐすり)の場合

肛門からの坐薬をもらったときは、冷蔵庫に保存しておいて下さい。抗生物質の坐薬は6～8時間毎に挿入して下さい。解熱剤の坐薬は、38.5度以上になったときには使用して下さい。(追加投与は6時間以上空けて下さい)子供をあお向けにして、足を上へ持ち上げて、泣かせる前に手早く挿入するのがコツです。坐薬が飛び出さないように、しばらく肛門を押さえておくことも大切です。また、子供の粘膜を傷つけないために親のツメは短く手入れしておいて下さい。1／2本とか2／3本の指示があれば、切り落として使用して下さい。指示が無い時は1本そのままを使用します。

飲ませ方・使い方レッスン

♡坐薬

解熱剤などの坐薬を半分に切って使うときは、包丁やナイフで斜めに切り込みを入れます。そして肛門に入れるのは、ロケット型の坐薬の頭のほうだけ。切り口のとがった残りの半分は、肛門を傷つけることがありますので、捨てたほうが賢明です。

♡塗り薬　●形状によって効果のある症状は違います●

塗り薬は軟膏のほかいろいろタイプがあります。たとえば、軟膏は基剤(のばす成分)が油脂。水分が含まれていないので、じゅくじゅくしている患部に適しています。また、クリームは、水と油脂が入っているのでカサカサ部分に効果を発揮します。ローションは水分のほか、アルコールも含むので、塗るとさっぱり感があります。このほか、病院などで調剤されるリニメント剤の一つに「カチリ」といわれる塗り薬があります。といた白玉粉のような感じで、塗ると乾いて白く残り、皮膚を保護します。水ぼうそうの治療に使われます。また、封をあけたチューブ入りの軟膏を使うときは、2㎜ぐらいをしぼり出し、ぬぐいとってから使います。

♡ローションタイプ　●コットンなどにとって●

ローションタイプの塗り薬は容器ごとよく振り、コットンなどにとってから肌へ。容器の口に手がふれると不潔ですし、余分な薬が出るのを防ぎます。

♡粉薬　●数滴の水でねり、上あごにつけたあと、飲み物を与えます●

粉末にはバナナやいちごの味がついているもの、苦くて飲ませづらいものなど、いろいろあります。シロップにくらべて保存性は良好です。飲ませ方は、粉薬を水でねり、それを味覚の鈍感な上あごの粘膜や口の奥の歯ぐきにつけ、そのあとミルクやジュース、お茶などを飲ませます。甘い飲み物のほうが、よく飲むようです。

コツは粉薬をねるとき、水をほんの数滴たらす程度の、うんと固めに練ること。少々粉が見えるくらいが適当です。そのほうが口の中の粘膜にうまくくっついてくれます。

粉薬を離乳食やミルクにまぜるのは、苦みのある薬だと離乳食ぎらい、ミルクぎらいになることもあります。

赤ちゃんに与える１回量は２㎖とか３㎖とか、ごくわずかです。普通、料理用の計量カップは200㎖であることを思い浮かべれば、その1/100。いかに微量かわかるでしょう。専用のキャップに計量目盛りがついていますので、必ず水平にして目の高さまで持ってはかります。また、キャップに山形の線があるものは、その山を二つに折るようにして斜めにキャップを持ち、手前と向こう側のカーブが重なったラインまでシロップを注ぎます。

●多く注いでも、びんには戻さないで●

ついうっかり多めに注いでしまっても、びんに戻さないで下さい。変質につながります。潔く全部捨て、初めからはかり直します。また、スポイトで与えるのも一案です。

スポイトで与えるのもよいでしょう。

応急手当と看護

◎発熱について

発熱は生体の防御反応として起こります。感染を受けたときに細菌やウィルスと生体が戦うときは体温が高い方が白血球の食菌作用が高まり合う目的であると考えられています。このため、熱っぽいというだけで安易に解熱剤を使う事はお止め下さい。38.5℃以上になるとぐったりして元気がなくなり、食欲も無くなります。このような時には解熱剤の投与をすることに意味があります。当院では、頓服（飲み薬）としてカロナール、坐薬としてアンヒバ（アルピニー）などのアセトアミノフェン製剤を処方しています。解熱剤の投与は、原則的には6時間はあけて、1日2回までにして下さい。

解熱剤の作用機序はいずれも発汗して気化熱で下げているだけですので、こまめに水分を与えて下さい。昔ながらの氷枕や濡れタオルで拭いてあげる事も非常に有効です。1～4歳位の子供さんでは、高熱（39.0-39.5℃）になると熱性けいれんが発生しやすくなりますので、お母さんが充分な看護をしてあげて下さい。

◎発熱や脱水による痙攣（けいれん、ひきつけ）が起きた場合

解熱剤投与と水分補給を早めにして頂いていれば、痙攣は起きないと思いますが、万一痙攣が起きた時はあわてずに冷静に行動して下さい。たいていの痙攣は５分以内に終わり、重篤な障害を残すことはありません。あわてて、救急車や車でお子さんを連れて来られてもかえってお子さんの状態を悪くするだけですので、次の注意事項を守って様子観察を充分にして下さい。

(1)お子さんを横向き、あるいはうつ伏せに寝かせて下さい（誤飲を防ぐため）。ぴったりとした衣服、とくにきついえりは、ゆるめて下さい。
(2)お子さんを押さえつけて無理に痙攣を止めようとしても無駄ですし、呼吸が一過性に停止しても心配ありません。呼吸がいびきの様に大きな音がするときは、顎を上方に引き上げて下さい。従来、口内に箸などを入れて舌をかむのを防ぐ様に言われていましたが，口内を傷つけたり、嘔吐を誘発したりしますので、行わないで下さい。
(3)39℃以上のときは、衣服を脱がして冷やしたタオルを顔と首に当ててから、体全体を濡れたタオルで何回も拭いて体温を下げるようにして下さい。
(4)解熱剤または痙攣止めの薬を追加投与して、痙攣の繰り返しが起きないように注意して下さい。
(5)痙攣を繰り返したり、痙攣後の意識回復が悪いときにはご連絡下さい。

◎熱傷（やけど）について

赤ちゃんのやけどのほとんどはお母さんの不注意が原因です。手足の小さなやけどはすぐに水道水で20分以上冷やして下さい。範囲が広いときは局所を冷やしながらすぐに外科または熱傷の専門医のいる病院（この近くでは愛知医大）に連れて行って下さい。当院は小児科が専門ですので、軽傷なやけどは処置致しますが、広範囲の時は愛知医大の形成外科へ行って下さい。

◎異物誤飲について

赤ちゃんの手の届くところには飲み込みそうな物は置かないのが鉄則。ボタン式乾電池は危険です。ボタン、指輪、硬貨などは苦しまなければ様子を見る事ができます。農薬、トイレ用洗剤、石油、車のワックスなどの時はすぐに、救急救命センターのある第3次病院（愛知医大052-264-4881、第二日赤052-832-1121）へ。

WAKABADAI CLINIC

(PEDIATRICS · OBSTETRICS & GYNECOLOGY)

小児科
産婦人科

医療法人 **若葉台クリニック**

小児科 鈴木信子
産婦人科 鈴木正利

http://www.wakabadai-clinic.or.jp/